

#### 4. 天然記念物「<sup>あきたいぬ</sup>秋田犬」を守り育てる歴史的風致

本市には、国指定の天然記念物が6件も存在し、中でも「秋田犬」は古くから人々の日々の暮らしと共に歩んできた。そして、大館城下に設立された「<sup>あきたいぬほぞんかい</sup>秋田犬保存会」が、大館城跡で本部長展覧会を開催し、血脈を守る活動を継承してきた。市民にとって、飼い主と秋田犬が散歩する姿は、大館の原風景そのものである。

##### (1) 天然記念物「秋田犬」

###### ①秋田犬の歴史

日本犬の祖先は、最北系・中北系・南方系の3系統があり、この内最北系が、最初に日本に渡来したといわれている。形態的には大形・中形・小形の3系統があり、大形犬の代表が秋田犬である。

秋田犬は、江戸時代から武士や豪農に番犬として飼われ、大館城代の佐竹氏は、闘犬により家臣の闘志を養ったと伝えられている。明治後期からは闘犬熱が盛んになり、強い犬にするために土佐犬などの血が混じり、秋田犬の純粋性が危ぶまれるようになった。

このような時代、大館の人々は秋田犬を保存する活動を粘り強く続け、秋田犬は昭和6年(1931)7月、日本犬で最初の天然記念物に指定された。

戦後も純血種保存の活動を根気よく展開し、現在は全国各地で秋田犬が飼育されている。

###### ②秋田犬の特徴

秋田犬の特徴は、耳が開いて立ち、巻尾で、がっしりした骨格、筋肉の発達した四肢の堂々たる体躯から品位と威厳が感じられ、性格は鋭く勇ましい反面、おとなしく忠実である。

秋田犬は、大館地方が原産なので当初は「<sup>おおだていぬ</sup>大館犬」と言われていたが、天然記念物に指定された際の名称が「<sup>あきたいぬ</sup>秋田犬」であったことから、以後そのように呼ばれるようになった。



大正10年、大正天皇へ献上した秋田犬



<sup>かつほ</sup>大正時代にまちを闊歩する秋田犬



天然記念物「秋田犬」

## (2) 秋田犬の血脈を守る人々の活動

### ①秋田犬保存会の設立と運営

明治末期から大正時代にかけて強犬作出の風潮が強くなって、他犬種との交配が繰り返され純粋秋田犬が絶滅の危機に瀕したため、当時の泉大館町長をはじめ大館の愛犬家たちが保存活動を始め、昭和2年(1927)には有志による「秋田犬保存会」を大館で結成し、純血種の探索と種の保存に取り組んだ。

こうした活動が実を結び、昭和6年(1931)には大館町内の純粋種 10 頭が天然記念物犬に指定されたのである。

その後、昭和11年(1936)には秋田県全体の「秋田犬保存協会」が結成され、会長には児玉知事が就任した。

秋田犬保存会は、昭和28年(1953)5月社団法人組織へ移行後、翌年には秋田犬保存会と秋田犬保存協会が一本化して現在の「秋田犬保存会」が誕生し、平成27年5月に公益社団法人となった。

本部を大館市に置いた秋田犬保存会は、昭和24年(1949)頃から全国各地に支部、総支部を設立し、現在では、東北北海道、関東、東海北陸、関西、中国四国、中国瀬戸内、九州に総支部が置かれ、その管下には49の支部がある。海外には、米国、中国、台湾、ロシア、ヨーロッパなどに12クラブがある。

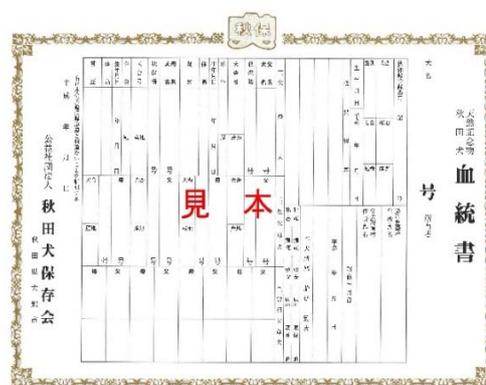
また、秋田犬保存会は、秋田犬の犬籍、犬舎号の登録及び血統書の発行を行い、天然記念物の血脈を守っている。合わせて、展覧会や研究会の開催、会報の発行により、秋田犬の保護・繁殖及び普及活動に力を入れている。

さらに、秋田犬保存会には、国内外の支部やクラブを通じて犬の出生届が提出され、純血として認定した70万件の血統書データを蓄積し、「秋田犬」の血脈の継承を図っている。

そうして昭和47年(1972)には、会員数14,199人・登録数46,225頭に達したが、その後どちらも減少の傾向にある。しかし、最近秋田犬の人气が再燃しはじめ、特に海外での人气が急上昇し、本部展覧会に訪れる外国人観光客が増えている。



昭和45年大館へご訪問の皇太子、同妃殿下へ秋田犬の仔犬をお見せした



血統書



会報「秋田犬」

秋田犬会館は、保存会設立 50 周年を記念し、会員はじめ全国からの浄財により、昭和 52 年(1977)に建築された。内部には本部事務所のほかに博物室を整備している。

昨今では、玄関で実物の秋田犬と対面できることから大勢の方が訪れている。

また、国道 7 号を跨ぐ桂城橋は、地元建設会社の寄附により昭和 53 年(1978)に架橋され、秋田犬本部展覧会を開催する「桂城公園」と秋田犬会館を繋いでいる。



三ノ丸に位置する「秋田犬会館」と「桂城橋」

## ②「秋田犬」標準(審査基準)の制定

秋田犬保存会では、昭和 13 年(1938)に秋田犬標準を制定し、正しい秋田犬のあり方として「沈毅にして威厳を備え悍威に富み、忠順にして素朴の感あり、地味な中に品位を持ち、感覚鋭敏にして挙措重厚敏活共に備える」と示している。

具体的には、本質と表現、外貌、頸、頭、耳、眼、口吻・鼻、歯牙、胸腹、背腰、前肢、後肢、尾、被毛、毛色の 15 項目について「標準」を定め、展覧会での審査基準としている。

さらに審査では、減点対象・失格要件を定めて基準を明確にしているほか、ガイドラインにより各チェック項目のポイントを定め、審査の透明性を高めている。

また、秋田犬保存会では、良い秋田犬を輩出するためにその模範となる「歴代秋田犬保存会名誉章犬」や「作出功労犬」を広く紹介し、合わせて研修会や勉強会を開催するなど、優秀な秋田犬がたくさん育つよう奨励している。

No.	犬名	写真	No.	犬名	写真
1	いちのせき 一ノ関ゴマ		2	ごろうまる 五郎丸	
3	きよひめ 清姫		4	たいへい 太平	
5	たまぐも 玉雲		6	あずまざくら 東桜	
7	くもまる 雲丸		8	たいうんめ 大雲女	

「8頭の作出功労犬」秋田犬保存会資料より

### ③秋田犬展覧会

昭和30年代より桂城公園(大館城本丸跡)を会場に秋田犬保存会主催の本部展覧会が、毎年春に開催されている。

この展覧会のルーツとなる記録を探してみると、昭和17年(1942)に第8回全国秋田犬展覧会を大館で開催している。

戦後の昭和22年(1947)11月には、第11回(戦後第1回)展覧会が、大館の城南小学校校庭(35頭出陳)で開催されている。

その後、全国各地で展覧会が行われるようになったが、本部展覧会の大部分は秋田犬保存会本部に隣接する桂城公園を会場に開催され、平成28年春の本部展覧会は134回目を迎えた。

毎年5月3日の本部展覧会には、自慢の愛犬を連れた会員や大勢の観光客が全国各地から大館に集まり、楽しみにしている市民とともに会場へ詰めかける。

秋田犬は、生後数カ月が最も愛らしく人気が高いが、犬としての完成美は3歳以降といわれている。

その頃から渋味のある古武士的風貌を呈し、幼犬、若犬、壮犬、成犬と成長するにしたがって良くなる犬こそ、本質の良い犬であるとされている。

秋田犬は大型犬なので、食糧難だった戦時中は、やむを得ず飼育を制限された時代もあったが、そんなときにも飼い主や家族は愛犬を山中に隠すなどして、秋田犬を必死に守ったという。

また、血縁が近くなり過ぎる弊害を鑑み、他県へ贈った雄犬のもとへ、交配に際し血縁の心配のない大館の雌犬を連れて繁殖した記録もあり、先人の苦労の積み重ねが、大館で開催されている本部展覧会に繋がっていることを考えると感慨深いものがある。



戦前の展覧会



昭和25年5月開催第14回全国秋田犬展覧会  
大館町城南小学校校庭



平成28年5月開催第134回全国秋田犬展覧会  
桜櫓館を背景に桂城公園で開催する本部展覧会

#### ④秋田犬と市民の活動

市民は秋田犬に対する愛着が深いだけでなく、その像やデザインにも熱い思いがある。

古くは、昭和 10 年(1935)に大館駅前への忠犬ハチ公銅像建立に始まり、その後も「忠犬ハチ公銅像維持会」の方々による銅像の保全が行われ、昭和 20 年(1945)の金属回収で銅像供出後は、「ハチ公銅像再建委員会」の関係者が熱心な募金活動を展開した。



大館駅前で開催している「ハチ公生誕祭」

その結果、昭和 39 年(1964)に大館駅前へ「秋田犬群像」の建立が実現し、昭和 62 年(1978)には「忠犬ハチ公銅像」を同じく大館駅前に再建された。

ハチ公の慰霊際は、昭和 10 年(1935)3月8日のハチ公の死を悼み、同月 12 日に蓮荘寺で行われたのが始まりであり、大館駅前へ設置のハチ公銅像と共に愛犬家や市民が集まり冥福を祈った。現在では、忠犬ハチ公銅像及び秋田犬群像維持会の活動を秋田犬保存会が継承し、毎年4月にハチ公の慰霊祭、10月に生誕祭を大勢の市民と一緒に開催し往時を偲んでいる。

#### ⑤秋田犬による交流

秋田犬が縁で、国内外へ交流が拡大している。古くは、昭和 12 年(1937)、奇跡の聖母ことヘレン・アダムス・ケラー女史が来日し、秋田県で講演会を行った際、「記念に忠義な秋田犬を連れて帰りたい」と語られたことから、秋田警察署の小笠原巡査部長(大館出身)が連れてきていた生後間もない仔犬を贈り、女史と共に海を渡った。

この仔犬「神風号」は、渡米2箇月後、病気で死亡したため、昭和 14 年(1939)に再び小笠原氏の愛犬「剣山号」がケラー女史のもとへ贈られ、両国の親善に大きく貢献した。



ケラー女史署名入りのお礼書簡

また、忠犬ハチ公の縁で大館市(ハチ公の生まれ故郷)、東京都渋谷区(ハチ公が暮らした街)、三重県津市(ハチ公の飼い主、上野博士の出身地)、山形県鶴岡市(ハチ公を世に広めた斎藤弘吉の出身地)との交流が古くから続いている。

平成 24 年(2012)には、佐竹秋田県知事から愛犬家として名高いロシアのプーチン大統領へ、東日本大震災時の支援に対する御礼と、大統領就任をお祝いとして、秋田犬保存会の協力により当市で育った牝の子犬「ゆめ」が贈呈された。



秋田犬「ゆめ」の寄贈式

### (3) 秋田犬とゆかりのある町なみ

#### ①大館城本丸跡の桂城公園

本丸にあった城館は、<sup>けいおう</sup>慶応4年(1868)の<sup>ぼしん</sup>戊辰戦争で落城、焼失したが、城跡の面影を残す石積みや土塁、堀が今も残っている。

城跡は、明治7年(1874)に中<sup>なかじょう</sup>城学校用地となり、校名を変えながら小学校用地として利用された。その後、昭和29年(1954)に本丸跡にあった桂<sup>けいじょう</sup>城小学校が水門町へ移転し、本丸跡は昭和31年(1955)10月に桂城公園として利用が開始された。

桂城公園として整備されて以降、本丸跡は行事や賑わいの拠点となり、秋田犬本部展覧会が毎年春に開催され、全国から大勢の会員が自慢の秋田犬を連れて桂城公園を訪れている。



大館城本丸跡の桂城公園

#### ②桜櫓館

旧大館町長を務めた桜<sup>さくらばぶんぞう</sup>場文蔵氏は、秋田犬保存会の第三代と第六代の会長を通算14年務め、秋田犬保存会の礎を築き、秋田犬の発展に大きく寄与された。

昭和8年(1933)築造の桜<sup>おうろかん</sup>櫓館は、桂城公園の西側に近接し、平成11年(1999)に国の有形文化財に登録された個人所有の建造物である。桜場氏の私邸であり、市街地が大火に見舞われた際に、奇跡的に残った昭和初期の貴重な木造建築である。

四方にガラス窓を配した展望台は、2階の屋根から突き出るように見える特徴を持ち、現在の所有者である<sup>なりたきんじ</sup>成田欽治氏の尽力により大事に保全、公開され、展示会などに利用されている。



天然秋田スギや樺の床板を用いた桜櫓館

#### ③侍屋敷跡に残る泉家の住宅

秋田犬保存会の初代会長を務め、大正15年(1926)から昭和5年(1930)まで大館町長を務めた泉<sup>いずみしげいえ</sup>茂家氏の住宅が今も大切に保全されている。

建物は明治時代に建造され、大館八幡神社と大館城本丸跡を結ぶ中間に位置している。

愛犬家の泉氏は、秋田犬の純血種探索と種族保存に熱心に取り組み、秋田犬保存会結成の中心となり、国の天然記念物指定に大きく貢献された。



秋田犬保存会の礎を築いた泉氏の住宅

#### ④侍屋敷跡に残る木村家の住宅

実業家きむらたいじの木村泰治氏は、大館駅前の忠犬ハチ公像建立に貢献され、またブロンズ像を宮中へ献上されるなど、秋田犬の保存と発展に多大な支援をされた。

同氏が、大正6年(1917)に建造した住宅は、後年に母屋の内部を改修したが、離れは概ね当時のままの姿で、大事に子孫が保存している。



秋田犬とゆかりの深い木村家の住宅

住宅には、宮家が滞在された記録も残されており、由緒ある和風の佇まいを大切に守っている。

#### ⑤秋田犬の像

市内には秋田犬の像がたくさんあり、その中でも代表的な像は、昭和39年(1964)5月に忠犬ハチ公の若い頃の姿を表現した大館駅前の「秋田犬群像」である。

大館駅前には、これより先に「忠犬ハチ公銅像」が昭和10年(1935)建立されたが、戦時の金属回収で昭和20年(1945)に供出後、関係者の努力により昭和62年(1978)に再建された。



大館駅前の「秋田犬群像」

なお、昭和10年建立の「忠犬ハチ公銅像」の台座は、その後桜場文蔵邸さくらばぶんぞうで保存後、昭和53年(1978)に台座のみ秋田犬会館前へ移設された。

月日は流れ、風雪にさらされていた主な台座へ、二代目ハチ公を蘇らせた人々の思いが高まり、平成16年に「望郷のハチ公像」として60年ぶりに秋田犬会館前の広場へ建立された。



大館八幡神社の秋田犬の石像

また、大館八幡神社には狛犬とは別に、昭和14年(1939)9月建立の秋田犬の石像があり、堂々いぬとしとした姿で出迎えてくれる。この石像は、明治の戌年生まれの有志によって1対建立されたものである。

## ⑥秋田犬の像の分布図

大館発祥の秋田犬は、市民に愛され市のシンボルとなっており、市内のあちこちで秋田犬の像を見かけることができる。秋田犬はもちろんであるが、その像に対する市民の思いはとても深い。

市民の力でハチ公の生家へ建立した「生誕地碑」と「ハチ公ふるさとガイドモニュメント」は、郷土の誇りを市民や関係者が熱意でした表現した賜物である。



## (5) まとめ

秋田犬が、飼い主と一緒に郊外や河川敷を散歩する風景は、飼い主と秋田犬の関係が猟犬から番犬、パートナーと役割が変化しつつも、大館の原風景として残っている。

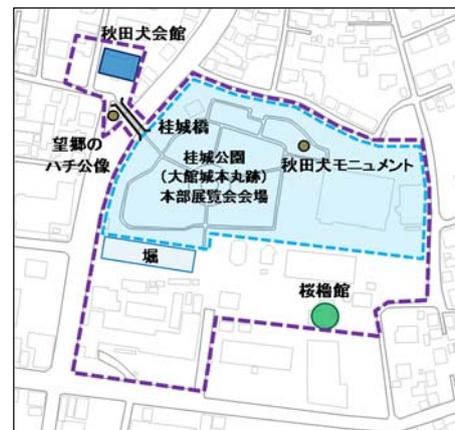
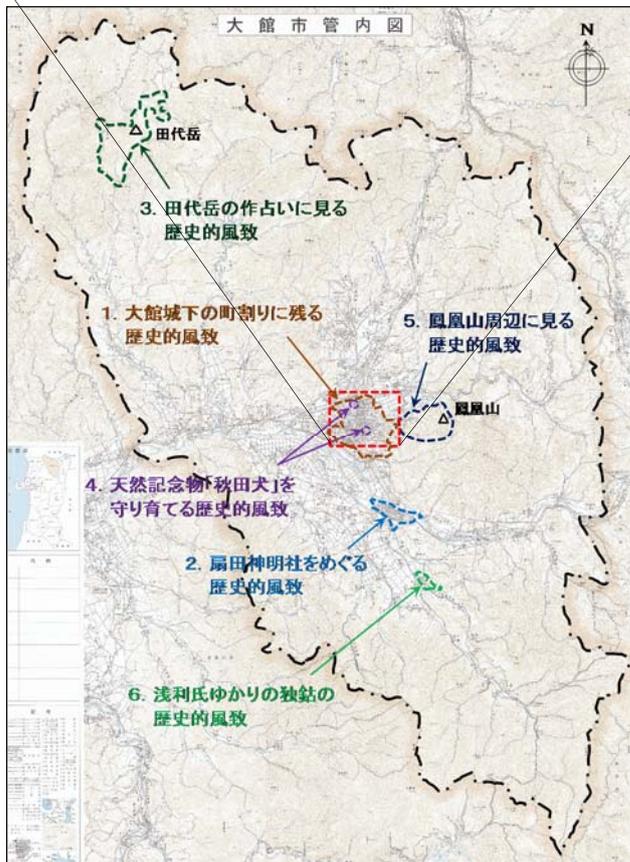
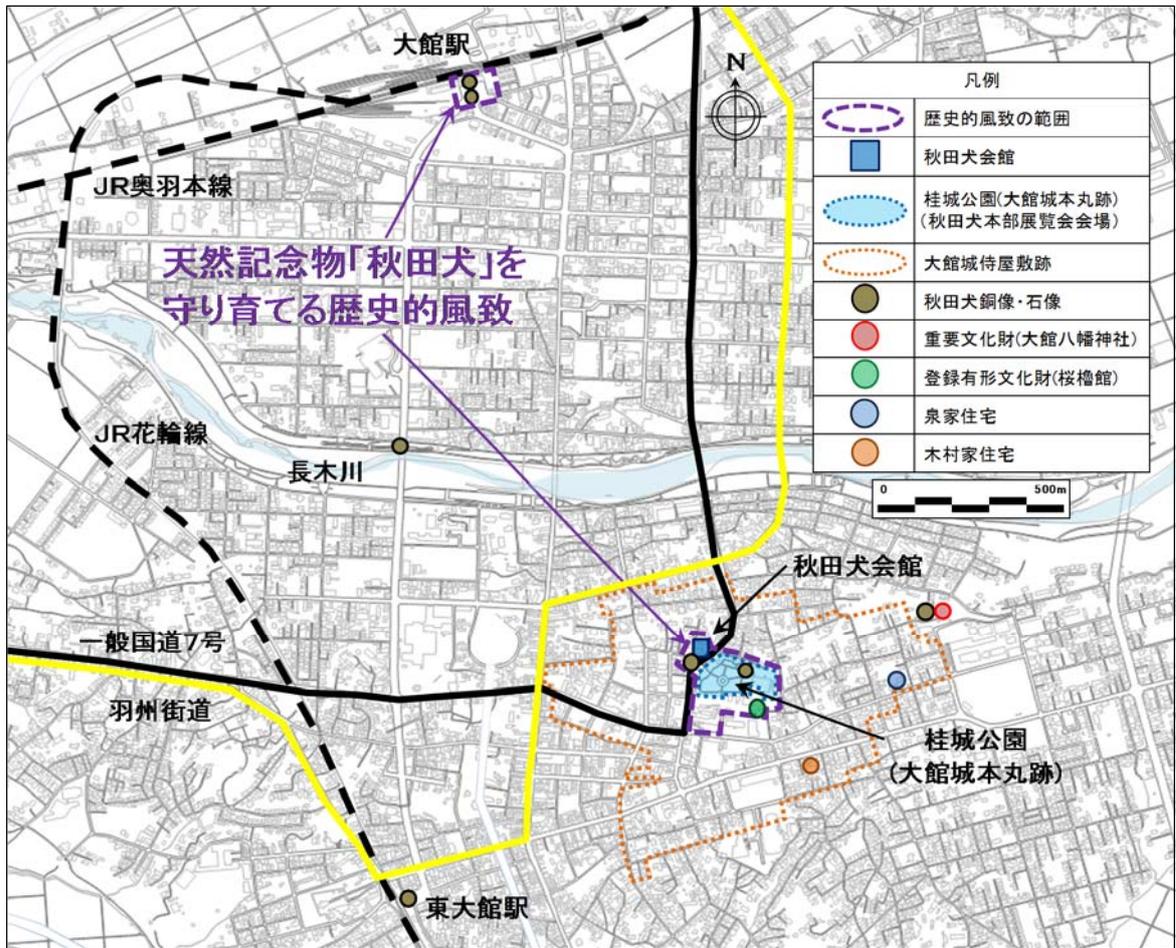
大館城跡での開催が続いている「本部展覧会」をはじめ、大館アメッコ市、きりたんぼまつりなど大館を代表するイベントやお祭りに秋田犬は欠かせない存在になった。また、市内のいたるところにみられる秋田犬の像やデザインは、秋田犬に対する大館市民の愛情が表れたものであり、これらが一体となって良好な歴史的風致を形成している。



アメッコ市会場の「秋田犬」



きりたんぼまつり会場の「秋田犬」



拡大図(上: 大館駅前、下: 桂城公園)

天然記念物「秋田犬」を守り育てる歴史的風致の範囲

## 【コラム】秋田犬をはじめとした犬と人々の営み

### ①忠犬「ハチ公」の物語

#### ○ハチの生誕地は大館市

ハチは大正 12 年(1923)11 月に、秋田県北秋田郡二井田村(現大館市) むら おおしなの豪農である齋藤義一宅 さいとうぎいちで生まれた。

年が明けて大正 13 年(1924)1 月に大館駅から東京渋谷駅へ送り出され、東京帝国大学(現東京大学)農学部教授の うえのえいざぶろう上野英三郎博士のもとで愛育され、「ハチ」と命名された。

そして、上野博士が出勤の際には、いつも渋谷駅まで随伴するのを常とした。残念なことに、大正 14 年(1925)5 月に上野博士が急逝されたが、その後もハチは故人を慕って毎日決まった時間に渋谷駅前に佇んで、主人の帰りを待ち続けた。

ハチが、広く知れ渡るようになったのは、日本犬の純血保存に努めていた犬の研究家である さいとうひろきち齋藤弘吉氏が、「朝日新聞」に投稿し、昭和 7 年(1932)10 月 4 日付朝刊に「いとしや老犬物語、今は亡き主人の帰りを待ちかねる 7 年間」という見出しに写真入りで報ぜられてからである。

#### ○ハチと人々の営み

昭和 9 年(1934)4 月に、大勢の方々の寄付により渋谷駅前にハチの銅像が建立された。また並行して大館でも、ハチの銅像建立の運動が生まれた。

ハチは、故郷での銅像除幕を待たず、昭和 10 年(1935)3 月 7 日から翌 8 日にかけて亡くなったが、当時の国鉄から大館駅の用地使用許可がおりたのが、奇しくも同年 3 月 7 日であり、同月 12 日に市民 80 人が当市の れんしょうじ蓮荘寺に ついでかい参列し追悼会が催された。

その後、昭和 10 年(1935)7 月に大館駅前へ建立されたハチ公の銅像除幕式には、故上野博士夫人やハチ生前の渋谷駅長であった吉川氏をはじめ、千人もの市民が参列しハチを偲んだ。

昨今では、ハチ公没後 80 年にあたる平成 27 年(2015)3 月 8 日に、「ハチ公と上野英三郎博士の像を東大に作る会」の方々や関係者の尽力により、上野博士が教鞭をとられた東京大学農学部正門の右側に、銅像が建立され除幕式が行われた。小雨の中、数百人の方々がハチと上野博士の 90 年ぶりの再会を祝福し「上野博士とハチ公の対面した銅像」は、「人と動物の相互敬愛の象徴」となっている。



晩年のハチ



国立科学博物館のハチ公の剥製



上野英三郎博士とハチ公の銅像

## ②老犬神社を基軸とした人々の営み

ろうけん

老犬神社は、大館市葛原地区(旧南部藩に接した旧秋田藩の東側)の山腹にある。社殿は昭和11年(1936)7月18日未明の火災で焼失したが、その後改築し、現在も毎年例祭が行われている。

宵宮祭は4月16日、本宮祭が4月17日に開かれ、国土の天変地異を鎮め、五穀豊穰、家内安全、交通安全等を祈願し、本宮祭は一般の方も見学できる。

また老犬神社には、古くから<sup>さだろく</sup> 狩師の定六<sup>ひだろく</sup> (左多六)と、その飼犬シロの悲話が地域に伝えられ、その物語に登場する「シロ」が祀られている。

物語は数説あるが、不幸な死を遂げた主人定六(左多六)を慕う<sup>さだろく</sup> 狩犬シロを忍び、祟りを鎮めるため山腹へ神社を建立し祀ったと伝えられている。

そして地域の人々は、永くこの悲話を伝え、今も「シロ」への愛情を守り続けている。

また、老犬神社は秋田犬保存会との交流も深く、社殿の隣には関係者の石碑が建立されている。



秋田スギに囲まれた「老犬神社」



再建された「老犬神社」



老犬神社内の秋田犬と地域の人々